

地球環境問題の解決のために 日本農業はどうあるべきか

評者 秋元浩治（日本の種子を守る会）

地球環境問題について書かれた本は数多あるが、現状や、発生からこれまでの経緯などに多くが割かれ、問題を解決するための方策についての記述が少ないものが多い。それに対してこの本には、地球環境の激変をどう防ぐのか、人類はいかに生きていくべきかが記述され、具体的な提案が出されている。著者は環境政策や農業政策に関わってきた元高級官僚の方たち。

耳慣れない学術用語や環境用語が出てくる。「アントロポセン」人新世とは、人類が地球環境の生態系や気候に大きな影響を及ぼすようになった1950年前後以降の地質時代区分。人類の活動が地質学的な変化を地球に刻み込んでいることを意味する。人類の時

代になって、自分たちの豊かな生活が、地球環境の復元力の限界値を超える問題を引き起こしてしまっただ。「プラネタリー・バウンダリー」は、地球を制御する様々なシステムが人類の望まない状態に急変しうる生物物理学的限界値のことだ。こうした限界値については、自然農法の父と呼ばれた福岡正信さんが、2003年の講演で話をされていた。その時、福岡さんは、このままではあと10年もしたら超えてしまうと警告しておられた。それからすでに17年。限界値を超えた地球環境問題にどう取り組んでいくべきか。それも、農業を軸とする活動で。

本書の記述によりつつ要約すれば、『物質と生命の循環』の視角から、農業への環境支払制度を確

立する、農村地域で持続的な農業農村を創るためのビジョンを共有する、地域で各種施策を総合化することが必要である。具体的な試みとして、本来の畜産に可能な限り回帰する、木質バイオマスを健全に循環させる、気候変動に備え水利システムを恒常的に見直すことが重要と説く。

環境と農業のかかわりに関心を寄せるすべての人、とりわけ現役官僚にはぜひ読んでいただきたい。



『人新世の地球環境と農業』

石坂匡身・大串和紀・中道 宏 著

農文協 1800 円 + 税